

# 教材研究の哀歓

— 小説教材のばあい —

原 田 悠 紀 子

## 目 次

- はじめに
- I 「赤がえる」のばあい
  - 1 教材研究に対してとつた方法
  - 2 教材研究のノート
  - 3 授業後の反省
  - 4 当時をふりかえって
- II 「李陵」のばあい
  - 1 教材研究に対してとつた方法
  - 2 学習指導案
  - 3 授業の実際と反省
- III 問題点  
おわりに

## はじめに

国語教師として五年目になるのに、自分がいったい何を問題として研究しようとしているのか、はつきりつかめていない状態である。今までの自分の歩んできたところをふりかえって問題点を探ろうと考えた。教材研究を深め、より効果的な学習指導をしようと思いつつ、なかなか教材研究が深まらないし、したがって学習指導も、うまくいかない。まず、そこに問題があるように思った。自分で小説を読むのは好きだが、充分な鑑賞指導ができていないといえないうちに思う。そこで小説の教材研究のばあい、どういう教材研究をし、それをどう学習指導に生かし、あるいは生かせなかつたかを教材研究の哀歓として随想的に述べてみよう。そこから一つでも二つでも問題をつかみだして、今後自分の教材研究を深め、学習指導をより効果的にしていく足がかりとしたい。

今まで四年半の間に取り扱った国語甲の教科書四種類にのせられていた小説教材は参考として最後にあげておりである。その

中から、二年目、三十三年五月に取り扱った島木健作の「赤がえる」と、二年目、三十五年二月に取り扱った中島敦の「李陵」の二つのばあいについて考えてみた。

はじめは、一年目から五年目まで各年一つずつ取り出して、教材研究がどのように行われてきたかを探るつもりであった。しかし、一年目の「赤がえる」の失敗と、二年目の「李陵」の一応成功したばあいとで、問題は出つくしていると思った。一年目の教材から「赤がえる」を選んだのは、第一回の光葉会の佐本先生の研究発表を聞いて、私の学習指導は全然できていなかったという絶望的ショックを感じ、どんな教材研究をしていたのか、ふりかえてみようと思っただからである。二年目の「李陵」は興味をもった教材であったし、たま〜詳しい記録が残っていたのでとりあげたものである。

## I 「赤がえる」のばあい（昭和三十三年五月 一年目）

### 1 教材研究に対してとった方法

指導書はあまり見ずに、教科書を読んで、構成を主に段落ごとに語句の意味、内容を調べている程度である。

### 2 教材研究のノート

当時の教材研究をしたノートは、まず作者解説、広辞苑をひいたもの、次に段落ごとに語句の意味、内容を書き、主題を二、三行書いただけの次のようなものである。

### (一) 赤がえる

島木健作 小説家。本名朝倉菊雄。札幌生れ。東北大中退。プロレタリア文学運動の退潮期に登場。作品「獄」「再建」「生活の探

求」など。（一九〇三 一九四五）

（広辞苑）

P 35 L 1 — P 37 L 11

衰弱—おとろえ弱ること

底冷え—身体のしんそこから冷えること

圓鼻—かわやのにおい

芳香—かんばしいにおい

怒気—怒った気色。怒をふくんだ気色。

むら〜（副）①そここに群がっているさま

②俄かに怒るさま

③俄かに悪心のおこるさま

のたうつ〜くるしみがくこと

決断力—①しかと決めること ②善悪正邪の判決

修善寺へ行つた。私はたゞ静かな環境にたつた一人でいることを欲

したのである。

宿—失望。三階の端に近い所、一日じゅう絶対に日のます気づかない。

はない。

一日中薄暗い中に閉じこもっていなければならぬ。

私は、ひとり客の滞在客といういちばんのきらわれ者。

毒念ともいふべきものがのたうってきた

決断力がない

外に出て日だまりにばんやり時を過ごして帰って来る。

P 37 L 12 — P 38 L 5

桂川の流れに沿って上って行った 明るい秋の午後

川の様子—土がむき出して洲

流れはすぐ合っ一つになっている。

P 45 L 3 — P 46 L 6

さつきからのことを考え続けた  
赤がえるの運命―悲劇的なものに思えた  
執念の原動力―依然わからない

私には本能的な生の衝動以上のものがあるの  
かと思えなかつた

明確な目的意志に基いて行動している者からでなくてはあの感じは  
こない。

―すべてそこには表情があつた、心理さえあつた。人間のばあい  
のようにこつちに伝わってきた。

かえるからさえこの感じがくる。

刀折れ、矢尽きた感じがあつた。最後に運命に従順な者の姿があ  
つた。

私の迂愚―力に余る困難にいとむことそれ自体が赤がえるの目的意  
志でもあるかに考えているような

あゝ、深い感じ―私には本能的な生の衝動以上のものがあるの  
かと思えなかつた。

私は自然界の神秘ということを深く感じていた、そのときと、今と  
は同じではない

天体のこと、宇宙のことを考え、そこを標準として考えて立てて  
みる

そこに信頼を寄せている感じには両者に共通なものがあつた  
天体のこと宇宙のことを考え、割然として救われたような心の

伏線

かえるを見て自然の神秘を感じている

P 46 L 13 — P 46 L 15

私は昼出た時とは、まったく違った気持ちになって宿へ帰った。昼出  
た時、暗いいらいらした気持。今は、そういう俗悪なものがすこし  
も気にならない。

P 46 L 16 — P 47 L 4 最後の五行

赤がえるを見た時の感銘だけを心にとどめて帰る。

心境小説―作者の心の動きをたどつたもの

「かえる」が主人公でなく作者の心情が主

3 授業後の反省

(1) 日記(33・5・23金)

二Bの生徒の一人の発言が、この心境小説の扱い方に反省を与え  
てくれたこと。もつと赤がえるを見て作者が感動したのはなぜかを  
追求すべきであつた。

(2) ノート(授業後のノート記述。日づけなし)

① 心境小説の扱い方として、赤がえるの様子の描写のところを区切  
ってやめていく方法はあまりよくなかつたと思う。作者の心境に  
重点があることを、いろいろな角度から考えさせておいて主題に  
はいるべきだつた。

② なせ、作者が赤がえるを見て感動したのか、それは作者自身の生  
き方とどうつながっているのかという点の追求がたりなかつた。

③ この生徒には、もつと意味を詳しくいつてやる必要があつたと  
思う。ただ言いかえがすめばすんだという点の考え方は、直して  
やらねばならぬと思うが。

④問題をもちと沢山考えて、それを考えさせ、書かすなどという方法をとる必要を感じた。

4 当時をふりかえって

当時をふりかえってみると、まず根本的なこと、教材研究のイロハともいうべきことがわかっていなかったといえる。教材研究が学習指導を効果的になされるように研究されていなかった。学習指導が失敗に終わった原因として次の四つのがあがる。

- (1) 目標がはっきりたっていない。
  - (2) 語句の意味は、単なる辞書をひく作業だけで、どの語をどう押えて作品の核心に迫っていくかの配慮がなされていない。
  - (3) 指示語についても、傍線はひいているが、はっきりした意識をもっていない。
  - (4) 問題を考えておいて、それを考えさせ、あるいは書かせてみたりしていない。
- その中でも、目標がはっきりたっていないことが一番大きな原因である。

Ⅰ 「李陵」のばあい (昭和三十五年二月 二年目)

これは、たまたま福山の誠之館高校で開かれた教科課程の説明会に來られた倉沢栄吉先生と柳川主事が、うちの学校に寄られることになり、国語科の授業を見ていただいたので、学習指導案が詳しく残されていたものである。

1 教材研究に対してもった方法

(1) 教科書の「李陵」を読み、教材の位置を考え、指導書を参考にし取り扱ひ方をきめる。

教材は、漢文の中におさめられているのだが、近代小説として、李陵の複雑な心理を読みとり、彼の生き方について考えることを目標にし、問題解決法でやることにした。宿題として「李陵」を読んでの感想、質問を書きこむようなプリントを渡し、それに書きこませて提出させた。生徒に渡したプリントは次のようなものである。その時の生徒の書きこみも一部だけ書いておく。

35・2・19 李陵を読んで

1、読み終った直後の感想をまとめてください。

非常に面白い 5人 ふつう 33人 興味がない 8人

○ 読み終った直後に思ったことを何でも書いてください。  
イ、李陵が蘇武に対する疑念は驚嘆の情に変わっていくところがとてもよかった。

ロ、蘇武は匈奴の仲間入をすれば楽な生活ができるのに祖国に対する清烈な国土愛の深いのに感動させられた。

2、登場人物 蘇武と李陵について感じたことを何でも書いてください。

3、筋について感じたことを書いてください。

4、漢文の「蘇武・李陵」と比してどう感じましたか。

5、主題について感じたことを書いてください。

ここの登場人物の場合、匈奴に捕らえられてからの二人の生活が描かれている。その中で特に李陵の方は匈奴に降伏したために暗い生活を送っていく、その姿が心理的にとらえられている。

6、書きかたについて感じたことを書いてください。

7、作者について感じたことを書いてください。

中島敦について知らないのだが、なにか他の本もよんでみたい。

中島敦について調べてみたい。

8、その他(考えさせられたことなど)

一、わからなかったこと(語句の意味、内容について)

二、話しあいたいこと

三、先生に聞きたいこと

(2) 生徒に宿題を出すことと平行して、あるいは先だったかと思ふが、「李陵」全体を読み、教科書に出ている部分が、全体の中のどういう部分を占めるのかの位置づけをしている。

(3) 中島敦の作品、経歴、作風などを近代文学鑑賞講座「中島敦 梶井基次郎」で調べる。他に彼の作品を文庫本二冊ほど購入して読んでみる。

(4) それらの作業の上になつて、生徒から出てきた、プリントの書きこみ、一、わからなかったこと(語句の意味、内容)二、話しあいたいこと三、先生に聞きたいことを整理して、プリントにして配っておいた。そのプリントは次に示すようなものである。そのプリントをもとに問題点を皆で考えて解決していくといった方法での具体的な指導案を作成した。

35・2・24

「李陵」を読んで

一、わからなかったこと

1、衛律は蘇武が鉄火の罵言に……

2、「雄羊が乳を出せば帰るを許さんと言われた話」とあるのですが、どういうことですか。

3、硬骨の士であることは疑ないとは。

4、節旄を持して曠野に飢える。

5、運命と意地の張り合いをしているような蘇武の姿とは。

6、蘇武の存在はかれにとって崇高な訓戒でもあり、いらだたしい悪夢であった。とは。

二、話しあいたいこと。

1、どうして李陵は蘇武に会いたいと思わなくなったのか。

2、蘇武は、なぜあんな苦しい生活をしたか。

蘇武は、一度は自殺までしたのに、後になって何を目的に生きぬいたのか。

3、李陵の蘇武に対する気持が初めと終りとでは違っている。これはなぜであろうか。

4、李陵がおのれ自身に対して、暗い懷疑に追いやられた時の心持は、どんなであつたろうか。

5、「そのことがひどく元気のなかつたのは、衛律に聞えることを恐れたのではない。」とあるが、それではどうしてか。

6、最後に李陵は「宴たけなわにして立ち上がり、舞いかつ歌った。」とあるが、どんな気持でしたのか。

7、蘇武と李陵の人生観というか、性格等と比較して私達であつたらどうであろうかということ話し合いたい。

8、蘇武と李陵の友情について。

三、先生に聞きたいこと

- 1、作家・作品について
- イ、中島敦について一般に言われていること  
有名作品について

どんな主義の人であったか。

ロ、中島敦がいつ頃書いた作品であるか。

何を参考としたか。

- 2、これは中国の小説のようですが、本当にあったのですか。
- 3、李陵と蘇武について何か逸話のようなものがあつたらおしえてほしい。
- 4、この李陵がおもしろかったので、これらについてもっと詳しい内容等を教えてほしい。

## 2 学習指導案

日時 昭和三十五年二月二十四日(水) 九・三〇―一〇・二〇

学級 至誠女子高等学校 二年商業科I(51名)

教材 総合高校国語 二下(実教出版)

単元 五 漢文

題材 李陵 中島敦

### 一、「李陵」の指導計画

#### (1) 教材について

「李陵」は、作者の死の翌年、昭和十八年七月号の「文学界」に遺作として発表された。生前中島敦と親交のあつた深田久弥氏がお悔みに行つた際、夫人から手渡された原稿は、読み判じ難いほど、苦心の推敲の重ねられた草稿であつたという。

現在、中島の最高の傑作とされるこの作品は、まだ、作者によつてその題名も与えられていなかった。現題の「李陵」は、深田久弥氏の命名による。

教科書にとられているのは第三節の後半(殆ほど)である。ここでは、蘇武と李陵との関係が描かれているが、あくまでも李陵の心の表現を主としたものであり、蘇武は李陵の心を動かすもの、李陵の複雑な心理過程をより強く反映させるものとして存在する。そして李陵の心理は、李広將軍の孫として漢室に忠誠を尽さねばならぬ身が、止むを得ぬ事情はあつたにしても降伏してしまつたという負い目と、訛言を信じて一族を殺戮したことに對する漢室への怨みとによる落ち着かない心として、巧みに描き出され、それが毅然として終始交らない忠誠の士、蘇武を隨所に点描することによつて、いっそう鮮やかに深い彫りをもつて刻み出されている。

#### (2) 指導目標

単元としては、漢文の中におさめられており、前章「蘇武、李陵」(資治通鑑)との関連を考へるように、「学習」として、一、この文を読み、それが後の李陵の文にはどう表現されているか、読んでみよう。という問題があげられている。この問題は、後で考へることにして、「李陵」は、ただ漢文に題材をとつた作品だと紹介するのでなく、近代小説として李陵の複雑な心理を読みとり、彼の生き方について考へることを目標にしたい。一年の短編小説、二年の中編小説と関連させて小説の読み方を身につけさせたいと思ふ。具体的には、生徒から出された二、話しあいたいこと1―8までの話しあいをしながら考へを深めさせたい。

#### (3) 指導計画

取り扱う時間は二時間(本時はその第一時)

宿題として、李陵を説ませ、一、わからなかったこと 二、話しあいたいこと 三、先生に聞きたいことを書かせた。その中から皆で取り上げていくべき問題をプリントし、それによって授業をすすめる。

問題解決による学習

① めいめいで読んで問題点を書く。

② 問題点をまとめて話しあう。(指導者も参加)

③ 新しい問題点を考える。

二、本時の指導計画

(1) 指導目標

① どうして李陵は蘇武に会いたいと思わなくなったのかを考えさせる。

② 李陵の蘇武に対する疑念は驚嘆の情に交っていく。その過程をたどらせる。

③ 中島敦の人と作品について大体のことを理解させる。

(2) 本時の指導計画

(1) 導入

・作業内容を指示する。

(2) 展開

① 感想、印象の紹介

② プリントをもとにし、三、先生に聞きたいことの①②について答える。

③ プリントをもとにし、二、話しあいたいことを皆で話しあう。(指導者も参加)

④ この間にわからなかったことについては質問を受けて、同時に考えながらすすめた。

(2) 終結

・本時のまとめと次時の予告

(3) 評価

3、授業の実際と反省

以上の学習指導案にもとづいておこなった授業の実際と反省を第一時から第三時まで簡単に述べる。

(1) 第一時、倉沢先生、柳川先生、理事長、校長、教頭、事務長など多くの方がみえたためか、生徒も少しかたくなっていたし、私の方が、後で見えておられる人を意識してか、間がもてなくてしゃべりすぎたきらいがあり、じっくり考えていくところにはいたらなかった。

この授業の後の話しあいの時、倉沢先生から、問題解決法は以前からやっているのか。増淵先生がこの方法でやっておられて、非常にうまくいっているようだ。もともと生徒の質もいから活発なのだろうがといわれ、この方法は、もつと続けてやってみられればおもしろいだろう。というお話があった。

私がこの方法をとってみたのは、祇園高校の研究会の時、佐本先生がなさった最編小説「夜明け前」の研究授業を拜見して、「生れいづる悩み」で試みたのが最初であった。「李陵」は、この方法をとった二回目のわけで、まだ皆で話しあいたいことなどという問題は浮んできていないものが多かった。その後も何回かこの方法をとってきいて、生徒の質は低いながらも、自分達の問題として考えるようになって、授業も生き／＼したものになってきているように思う。そ

れに、生徒の鑑賞の実態をつかんだ上で教材研究ができるし、中には、こちらがハット思われる素晴らしい感想も出てくる。

(2) 第二時 二、話しあいいたいこと の3「李陵の蘇武に対する気持が初めと終りでは違っている。これはなぜであろうか。」と4、の「李陵がおのれ自身に対して暗い懷疑に追いやられた時の心持は、どんなであつたろうか。」の二つの問題を考へて、李陵の気持の変化をたどり、この小説では何が中心となつてゐるかで考へさせた。李陵の気持が中心に描かれてゐること、李陵の気持がもっともであること、人間のだれにでもある心の弱さとして同情されるものとして、皆が受けとつたようであつた。この時間は、きのうの時間よりも問題が中心に迫つてきたこともあつて、多くの者の発言があつた。皆で考へて話しあつたという感じのものであり、皆熱心だつた。

(3) 第三時 二時間の計画は、やはり無理で三時間の授業となつてしまつた。話しあいいたいことのみ、二そのことばがひどく元氣のなかつたのは、韵律に聞えることを恐れたためではない。」とあるが、それではどうするか。」と6、「最後に李陵は『宴たけなわにして立ち上がり、舞いかつ歌つた。』とあるが、どんな気持でしたのか。』の二つを考へさせた。7、については話しあいができなかつたので、自分で考へてみるようにといつて終りにした。この時間、一部は非常によくついできたが、まだ皆がシーンと考へるとこまではいつていない。

学年末で、教材を早くあげなければ残つてしまふというふうな気持で、無理を知りながらたてた計画だったが、計画のたて方についても反省させられた。

## Ⅱ 問題点

以上二つの小説の教材研究と学習指導をふりかへてみると、多くの哀しみと少しばかりの歡びを見いだす。それを問題点としてあげてみる。

1、目標の確立がたいせつである。どの教材についても同じであるが、教材の読みを深め、その作品のねらいを指導書も充分参照しながらも、他人のものでない自分のものとして具体的に目標をとらえたいと思ふ。

2、小説の教材研究の時、教材研究といふことを離れてぐつとひきつけられる作品のばあいは非常に楽しいものである。たとへば、中島敦の「李陵」のばあいか、モーペッサンの「ジュールおじ」とかのばあいがそれである。読み流してしまへるような作品のばあいは、どうも充実感がわかない。人間の生き方、自分の生き方を考へさせる作品のばあいは、充実した感じがする。島木健作の「赤がえる」も、人生探求の單元にいられてゐる教科書もあるぐらいだから、人生について考へさせるものをもつてゐるはずなのに、その当時は興味をひかなかつたし、今、読みかへしても、何かフーンそうですか、といった白々しい気持を感じてしまふのである。心境小説のばあひ、作者の心境についていけない時に出てくる一つの問題であろうか。私の説みが浅いからだ、一方では反省しながらも、こゝろが感じは学習者の側にも出てくるものだと思ふのである。

3、好きな作品、好きな作家のばあひは、教材研究が楽しいし、ある程度深まりもするのであるが、嫌いな作品の時、深まらないようである。嫌いな作品とは、その作家、作品をあまり知らなかつたために、教材研究が浅かつたために、あまり好きになれなかつた



もいえる。たとえば、一年目に「山月記」を扱った時、むつかしい語句にひっぱられてしまつて学習指導がうまくいかなかった。「山月記」は、唐の小説の「人虎伝」に材をとりながら、中島は自分自身のものとなしきつて、詩人存在の運命の悲しさ、芸術に囚われたものの狂気という芸術家自身の心情の告白となつてゐるという読み方をしていただくか。「山月記」を読んで、おもしろかったから他の作品を読んでみようといった興味の動かし方をしていないところからみても、主題が充分読みとれていない、読みの浅いものだったのではないかと思う。次の年に「李陵」を扱う前になつて、中島の作品のほとんどを読み、ぐいぐい惹きつけられたところからみても、好き嫌いということ、その作者、作品を知ることとは相関関係をもつてゐるといえると思う。

このことは志賀直哉のばあいについてもいえるようである。昨年「ある朝」の扱いを「短編小説鑑賞指導の問題」として、祇園高校で研究発表をした際に、直哉の作品、研究書などをだいで読んで、今まで、ひとが直哉をはめるほどには、大した作家だとか、好きな作家だとか思つていなかったのであるが、今までの認識をだいで改めざるをえなくなつたことがある。

4、私は、だいたい小説の教材研究のばあいは、遠心的方法をとつてゐるように思う。教科書にとられてゐる作品だけでなく、他の作品を、あるいは長編の一部のばあいは、全体を、読むといった方法である。この長所としては、教材研究が広がりをもち、その作者、作品についてよく知ることができ、教室に臨む際に安心感をもつことができるということがある。長編小説の一部がとられてゐる時には、必ず全体を読みたいと思う。昔読んだというのでもいいと

思うが、教科書にとられてゐる部分が全体の中でどういふ位置を占めるのかを知つた上でないと、長編小説の鑑賞指導にはならないと思う。忙しくて大長編は読めない場合もあるうができるだけ、そういう心がけで進みたいと思う。

短所としては、他の方に時間をとられてしまつて、かんじんの教材の研究が浅いものになりがちな点がある。また、解説書とか、指導書などを読むのは、たいせつなことだしいいことなのだが、そこに書かれてゐることが、自分の解釈と違ふ時、あるいはどうもよく納得できない時にも、うのみにしようとする傾向をもつてゐるようである。ぎりぎりのところ自分がどう受けとめたのかははっきりしないままに授業に臨むことは、学習指導が失敗に終る原因になると思う。

一年目は、教科書に出ている作品以外に同じ作者の他の作品を讀もうという余裕をもつていなかったようである。五種類の教科書の教材研究で余裕をもつた教材研究ができていなかったという点は、かわいそうな気持がする。前の日になつてもあすの教材研究などという、その日暮しの教材研究でなく、他の作品を説めて、もちろんその教材の読みも深くなるといった教材研究にしたいものだと思ふ。広げすぎないで、教科書にのつてゐる部分だけを讀んで深めたらとも考えられるが、深さと広がりも関連してゐることだと思ふ。時間のない中で、どう深め、どう広げていくかは、今後の大きな問題である。

5、この発表をまとめるに當つて、改めて記録の重要性を認識したので、記録の問題点として、五つほどのことをあげたいと思う。

(1) 何を参考としたのか、どういう本を読んだのかの記録をすること。

(2) 日づけを落とさないように書いておくこと。

(3) 教科書への書きこみを記録として、どう定着させるかを考えること。

(4) 学習指導案をきちんとたてて残すこと

(5) 反省は後に生かせるから、授業後すぐに書きつけておくこと。その日の授業の実際とともに。これは後になっては、とても再現できるものではない。

おわりに

小説教材の教材研究の哀歓を「赤がえる」「李陵」の二つのばあい、一年目と二年目の実践で述べてきた。今の段階での問題点は、これで一応でつくしていると思う。一年目の実践と二年目の実践で

今まで使用した教科書に載せられている小説

1 言語と文学 秀英出版 33年 二、三年 34年

		Ⅰ 大単元名	表現のくふう	短編小説
		小単元名	戯作三昧 芥川竜之介 赤がえる 島木健作	山月記
		Ⅱ 大単元名	表現と鑑賞	
		小単元名	高野聖 ×夜明け前 島崎藤村 ×青年音楽家の夢 (ジャン クリストフ)	

は、教材研究についての考え、学習指導についての考えにかなりの違いが見られる。これは、光葉会、祇園高校の研究会その他の研究会で、他の先生方の貴重な発表から学んだものが多いと思う。国語教育の理論書から学ぶべきことは多いはずであるが、勉強を怠っているのが現状である。

五年目の現在の指導と、二年目の「李陵」の指導を比較して、どれほどの進歩もしていない。現在の方があるいは技術面でうまくなっているかも知れないが、一、二年目の何でも自分のものにしてやろうというファイトがなくなっている。ここにも今後の大きな問題があると思う。

この作品で、どういう発見ができたかという作品そのものを読み深めていっての喜びについては触れていない。まだその段階には達していないようである。今後、作品研究としても独立しうるような深い教材研究という面での哀歓が語れるようになりたいと思う。

2 総合高校国語 実教出版 33年 一年 34年 二年 35年 三年

		中島 敦 さんしゅう魚 井伏 鱒二 もず 志賀 直哉	
			ロマン・ロラン

短編小説	Ⅰ (33年) 大単元名	小単元名 作品 ほりばたの住まい 志賀 直哉 たばこと悪魔 芥川竜之介
中編小説	Ⅰ (34年) 大単元名	小単元名 作品 たけくらべ 樋口 一葉 吉野くず 谷崎潤一郎 詩文 李陵 中島 敦 漢文
長編小説	Ⅱ (35年) 大単元名	小単元名 作品 虞美人草 夏目 漱石 波江抽斎 森 鷗外 旅愁 横光 利一

3 国語 筑摩書房 34~36年使用

Ⅰ (34年)	× 走れメロス 大根の葉	一	大塚 治 壺井 栄
Ⅰ (35年)	潮騒 恩讐のかたに		三島由紀夫 菊池 寛
Ⅱ (36年)	短編小説 舞姫	小単元名	ある朝 森 鷗外 志賀直哉

生れいずる悩み	有島 武郎	ひな 史記 (李陵)	芥川竜之介 司馬遷 中島 敦		風波 魯 迅 ジュールおじ モーパッサン
近代の小説(一) I (35・36・37年) 大単元名	小単元名 草枕 夏目 漱石 舞踏会 芥川竜之介 伊谷の踊子 川端 康成	世界の文学 I (36) 大単元名	小単元名 チボー家の人々 デュルガール	東洋と西洋 II (37年) 大単元名	小単元名 妄想 森 鷗外 たけくらべ 樋口 一葉 暗夜行路 志賀 直哉 ×夜明け前 島崎 藤村

×印は、教室で取りあつかわなかったもの

(至誠女子高校教諭)